

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4371200066		
法人名	社会福祉法人姫戸ひかり会		
事業所名	グループホームひかりの園ビハール館		
所在地	熊本県上天草市松島町今泉1004-1		
自己評価作成日	平成25年11月4日	評価結果市町村受理日	平成26年3月3日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人ワークショップ「いふ」		
所在地	熊本県熊本市水前寺6丁目41-5		
訪問調査日	平成25年11月19日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

運営理念、「ビハール」=安らぎの場所の実現を目指しています。想い通りにならない人生の中で、どのような状態になろうとも安心してありのままの自分でいられる生活をめざしています。私たちは、老病死の苦しみや悩みを直視し、自らの問題として皆さんと共に歩みたいのです。そして人としての思いやりや優しさ、生きることの厳しさ、悲しみ、そして喜びを、みほとけの大悲のひかりの中に分かち合いたいと思います。かけがえのない一人の存在として受け入れられる人と人との出会いが自然に行われる生活の実現を願っています。また、一人一人の力を引き出した介助が出来るよう、RX組の研修を取り入れたり、今まで培って来られた人生経験を大切にしたいその人らしさを指すために、T式実践ネットワーク研修を取り入れ、入居者や家族から信頼されるグループホームをめざしている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

施設長は、県内外の多くの福祉関係の専門家との交流を持ち、自らの学びを職員に伝えて職員研修に力を入れている。研修内容は介護の実践に生かされているが、常に「まだまだ」という気持ちで業務に取り組んでいる。利用者主体のケアを心掛け、介護4の人が2にレベルアップした事例もあり、「出来ない」を「できる」に変えることを努力している。職員は安定した業務に当たり、連携・連絡がうまく働いて、利用者への落ち着いた生活が提供されている。ホームでは外出の機会を多く作り、閉じ籠らない暮らしの提案や、四季折々の行事を暮らしに取り入れることで、家庭での生活感を大切にしている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	運営理念に基づき、入居者の尊厳を大切に「その人がその人らしく生活を送る」ことを支援する。入居者・家族・地域とのより深い信頼関係が構築できるよう努めている。	仏教の精神を大切に、古代インドの言葉「ビハーラ」を施設名として利用者に「安らぎの場」を提供している。その人らしく暮らす家として家庭的な感覚で、レクリエーションや体操等が業務にならないように、利用者が主体的に暮らせるよう、その人に合わせた支援となっている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	年間行事の中で、地域食堂フェスタ等を開催しており、地域の方々に参加して頂き、ボランティアや地域貢献バザー、地域食堂イベントを行ったりと地域の方々とつながりながら暮し続けるために取り組んでいる。	3年前から、地域の10店舗の協力があり、「地域食堂フェスタ」を開催。多くの地域住民の参加を得ている。その他、保育園児慰問や、近くの高校生の実習受け入れ、認知症サポーター研修の講師として地域へ出向くことでグループホームを理解してもらうよう努めている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	立地条件としては、地域住民が気軽に立ち寄ってもらえる環境ではないが、認知症サポーター研修の講師として地域へ出向き、グループホームを知って頂ける場を作っている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議の中で、入退居状況・外出・外泊等の実績や様々な活動及び日常生活の様子を報告を行い、家族や行政、民生委員の方々の意見を伺いサービスの向上に活かしている。	運営推進会議は法人からの情報も提供され、法人の「情報発信の場、プレゼンテーションの場」としても活用されている。尚、事業所の利用状況やケアの現場を知って貰う絶好の機会と捉え、家族・民生委員・行政の方々と意見交換を実施。職員のモチベーションアップにも繋がっている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	地域密着型担当、地区の民生委員に運営推進会議に参加して頂いている。また施設での行事の際には多くの民生委員に参加を依頼しており、地域食堂フェスタには多くの民生委員の参加がある。	市町村担当者は、福祉関係の知識が豊富で、ホーム運営に関して協力的。制度改正に伴う疑問にもすぐ回答が得られ、頼もしい存在で、気軽に相談が出来る相手となっている。運営推進委員会にも参加を得て多くの意見を得ている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	年間研修計画として、身体拘束防止の研修を取り組んでおり、「身体拘束防止の基本的な理解と対応方法について」学ぶ機会を設けている。	職員は、拘束が利用者にとどのような影響を及ぼすかを学んでおり、帰宅願望のある利用者には「帰りたいのは当たり前」という意識を持ち、その心情を察した上で側に寄り添い、話を聞き、根気よく穏やかにその人の言動に合わせている。またスピーチロックやドラッグロック、ケア困難時に無意識に出るため息等、「どのような状況になろうとも拘束は行わない」と言い切れる介護を追求している。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	年間研修計画として、高齢者虐待防止の研修を取り組んでおり、「高齢者虐待防止の基本的な理解と虐待に対する意識高まる事で防止出来るよう研修を設けている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	年間研修計画として、権利擁護の研修を取り組んでおり、管理者より「権利擁護と命の尊厳」について学ぶ機会を設けている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入退居時には十分な説明を行い同意を得ており、質問や不安がある場合も十分な説明を行い納得して頂いている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	相談や苦情の窓口及び担当職員を明確にしており、入居者及び家族にその利用方法を文章と口頭で伝えている。また運営推進会議などで意見が出やすいようアプローチしている。	運営推進会議案内は、全家族に出しているが毎回参加者は2～3家族。毎月の「支払窓口」は利用者の本音が聞ける場となっている。家族が職員を褒め、それが職員の喜びとなっているが、「本当に苦しい胸の内を聞けるような信頼関係にどうつなげていくか」課題として取り組んでいる。次回の推進会議で「実践報告会」を開催し、家族に利用者の暮らしぶりや、変化を伝える予定としている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者はグループホーム会議の中で、職員が意見を述べられる場を設けている。また、管理者と職員との面談の場の機会もある。	年間行事計画の中に、定期的な職員研修が組み込まれている。施設長は県内外にホーム運営のアドバイザーとなるような人達との人脈があり、自らの学びの後、職員派遣で研修の機会を多く提供している。「できない事をできるに変える」ケアの実践と、「T式ネットワーク実践研修」のメンバーとして、他グループホームに出向いて、入居者の立場で気になる点をチェックしたり、「リスクマネジメント」を基に、資質向上に努める等が実践されている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人事考課制度を導入しており、チャレンジシート(目標管理)を活用し、各自の目標に向けて上司と相談しながら取り組める環境がある。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	研修については、年間事業計画にて定期的な研修を実施している。また、外部研修への参加や外部講師を招いてT式ネットワーク実践研修など取り入れ、自己の気づきと利用者のアプローチなどについて実践的な研修を行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	複数事業所T式天草ネットワークやグループホーム連絡協議会の開催する研修などへ参加しており、お年寄りの視点に立ち「誰のため 何のため」という意識を持ち、現場実践の見直しに取り組んでいる。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居希望時、本人からは認知症により不安な事や要望を直接聞き取る事は困難なケースも多いが、日常的な会話の中や表情からくみ取り、入居時の移り替わる事へのダメージを少しでも軽減できるよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居相談時に施設の方針の説明を行い、実際に入居者の生活されている状況を見て頂き、不安や不明な事に対して、その都度説明を行う。入居までの期間が未定であり、その間はいつでも相談受け付けが出来る事を伝えている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	相談時に家族環境・地域との関わり・現在利用されている在宅サービス等、現在の状況を踏まえた上で、入居のみではなく本当に必要なサービスを見極め、在宅で過せる可能性を視野に入れ対応している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	料理作りや野菜作りなど教えて頂く機会をつくっている。また、暮らしの中で、昔からの伝統行事(お正月、お盆、お彼岸)や郷土料理、お祭りなどの様々な知恵を教えて頂き、生活を共にできるようにしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族が気軽に訪問ができ、訪問時には居心地良く過せるよう積極的に取り組んでいる。和室やリビング、居室に案内し、家族だけで過ごす時間を大切にしている。また、家族と連携をとりながら、外出支援や自宅への帰省などを行っている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	面会等として、地域の方々が遊びに来られたり、立ち寄って頂けるよう取り組んでいる。また、同一敷地内で他のサービスを利用されている方との出会いも大切にし、関係が途切れないよう努めている。	毎日、入居中の妻に会いに来る夫。昼食の介助中で「ここに来るのが楽しみ」と笑顔が広がる。また、家族と共に一時帰宅する人など、其々の生活パターンに合わせた自由な暮らし方が支援されており、出来ない理由を考えず、出来る方策を考え、利用者の地元の祭りに同行するなど、人と地域の関係継続が大切にされている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者同士の助け合う気持ちが自然な形で見受けられる。その会話や行動(行為)をさりげない形でサポート出来るようにしている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居された後も見舞いに行ったり、退居された家族からも来館があったりと、契約終了後もお互いに行き来しやすい雰囲気づくりに心がけ、継続的な関わりを大切にしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居者一人ひとり家族構成、職歴、生活歴に配慮し、その人の思いを大切にし、じっくり向き合い会話の中から、要望をくみ取り、どの場面においてもその人のペースでその人らしく生活して頂けるよう支援している。	特養との合同の定期バスを利用して買い物へ外出。起床時の服選びに付き合ったり、帰宅願望時にはそばに寄り添い、ゆっくり落ち着いた言葉かけを繰り返し、信頼関係を築く努力が根気よく続けられている。職員には開設時から在籍する若い男性もおり、すっかり「孫」状態で可愛がられる存在。「入居者会議」を開催し、個別の意向を可能な限り把握し、強力な暮らしの助っ人となっている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	その人らしい暮らしや尊厳を支える為、ご本人にとって大切な経験や出来事等を含む生活歴を知る事は大切であり、家族やご本人との日々の会話の中から出来るだけ多くの事を知る事が出来るように努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	一人ひとりの日常の状態を把握し、異常の早期発見、対応に努めている。毎日バイタル測定し、日々の変化に気をつけている。変化については、ケース記録に記載し、申し送りを通して全職員へ伝達し、状態・状況の把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	一人ひとりにじっくり向き合い、その人らしい生活を送る事が出来るように、本人・家族に思いを聞き、介護計画を作成している。また、担当者会議を開催し、必要な場合は見直しを行っている。	利用者9名分の介護ファイルは、パソコン入力で、時系列に詳細な記録が見られた。日常の生活で、自分で出来る事が少なくなり、介護度が高くなった利用者も有り、日々の状態変化に対応しつつ様子を見ながら、年2回の介護計画の見直しが実施されている。	
		日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の状況については、ケース記録に記録している。それを基にスタッフの意見や思いを計画作成に取り入れるようにしている。状態変化があった場合には、ケア内容の変更を話し合い、職員間で情報共有を行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	要望については、インテーク時のみではなく、本人の状況や家族の要望などを家族面会時に聞き取るなどし、必要な支援を柔軟的に行えるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地区民生委員の方々に運営推進会議に参加して頂いたり、地域の物産館や公共の施設に出掛け、地域交流を図っている。自治会の会議や活動へ参加したり等、意欲的な生活ができるよう支援している。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居者又は家族が希望される医療機関を受診しており、日頃より状態の変化に対しては報告を行い、急変時や夜間帯も迅速に対応している。また、歯科についてもかかりつけ医師の受診や往診、他の医療機関への調整も行っている。	入居前からの掛かり付け医療機関を利用している入居者が多く、馴染みと安心感を大切にしている。家族が同行しての受診が出来ない場合は職員が対応し、家族へは受診結果が報告されている。健康が一番、早期発見と対応に努め、夜間・急変時の迅速な対応に心掛けられている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	心身の変化や異常発生時に気軽に相談できる医療関係者を確保し、協力医療機関の医師に相談にのって頂いている。また、併設の特養の看護師と医療連携体制を取っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院後も病院へ足を運び、担当医師・看護師長等と話し、状態確認に努めている。その時には家族へも同席して頂き、施設側の思いや方向性等を伝え、安心して頂けるよう対応している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居者の健康状態について、随時又は面会時に家族に連絡し、健康管理情報を共有している。日常の状態も家族面会時に細かい様子まで伝えている。入居者の心身の状態に異変が見られる場合は、その都度家族に連絡し、家族の意向を聞き対応している。	施設長は「日常の関わりがターミナルへとつながっていく支援」と考えており、毎日の介護・支援を大切にしている。利用者の状態に変化がみられたら、家族へ細やかに状況を伝え、常に情報を共有しながら対応している。過去にも約1か月に亘って家族と共に最後を見守った経験を持ち、職員は看取りについても前向きに捉えている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	グループホーム内の研修として、急変時の対応やバイタル測定方法の研修を行ない、緊急時には全職員が適切な対応が出来るようにしている。また、併設である特養の看護師の手伝いもある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	災害時に迅速に的確な判断や対応が出来るよう年に4回防災訓練を行っている。地域の分署からの来園があり、防災について、スプリンクラーの目的などについて指導を頂いている。	ホームは高台に位置し、水害の心配はないが、地震や火災・出火を想定して避難訓練を実施。法定では、年2回となっているが業務のシフトの関係で、全職員が参加できるよう、年4回の防災訓練を実施している。目的は、避難経路の確認や全員の安全確保と意識の啓発等。なお、災害時の連絡網の再確認も必要と思われた。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者一人ひとりの生活歴、その人らしい暮らしや尊厳を支える為に24時間シートを作成し共有出来るようにしている。	耳が遠いと思われる入居者が、職員の何気ない発言に「よう聞えているよ！」と反論したり、「ホラ、〇〇が見えている」と言わせてしまう等、スタッフのポジショニングの再確認が必要な場面も見られた。気心が知れて、仲の良い暮らしが展開されているが、9人の利用者それぞれの拘りを見直して見るのも良いと思われる。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	入居者一人ひとりの意思や思いを大切にしている。買い物や外出などを取り入れ、自分で選択出来る場面を多く持っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入居者個々の動作や会話のスピードに合わせて対応している。訴えがあった場合にはゆっくり時間を掛け、話を聞きながら、納得されるまで向き合い対応している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	起床や入浴時は、ご本人さんと一緒に衣服を選び、その時に着たい物を選んで頂き、一人ひとりの個性を大切にしている。希望に応じて、行きつけの美容室への外出なども行なっている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	地域のスーパーに出掛け食材を選んだり、入居者会議を開催し、旬の食材を取り入れた献立を考え、職員も共に食事し、一人ひとりの嗜好品を取り入れている。準備、片付けについては、その日の心身の状態を見ながら手伝って頂いている。	「入居者会議」で出された利用者の希望を極力メニューに反映。ホームへ来訪者を迎えるにあたっては、前日から「刺身」と「寿司」は必要だろう・・・等入居者からの意見も出されて、食材選びに力が入っている。調理は、職員がローテーションで担当。利用者も野菜の切り込みや味付け等を職員と一緒にすることもあり、ホーム開設以来、忘年会は「鍋料理」と決め、利用者の楽しみとなっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事記録表(食事量・水分量)を記載し把握している。摂取量が少ない方へは個別対応を行っている。(嗜好品の提供) 個々の状態に合わせ、咀嚼や嚥下状態を考慮し、多種多様に対応している。(普通食、刻み食)		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	口腔の清潔を日常的に支援している。1日3回(朝・昼・夕)支援しており、必要時には歯科医師などの往診があり、指導などを頂いている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	入居者一人ひとりの排泄パターンを把握し、個々の訴えを察知し、気を配りながらさりげなく誘導している。個別排泄プランを作成し活用している。	全員が、尿取りパット入りの布パンツ使用。車椅子の人も自力で立ち上がり、トイレ排泄が出来ている。トイレは、壁に手を付いて支えられる一般家庭に近い狭いトイレと、車椅子で入れる広いトイレの2通りがある。トイレの便座前には、小さなテーブルが設置され、両手を置いて体を支えたり、リラックスした姿勢での排泄が可能にしている。気が付くと利用者は職員に付き添われトイレを利用しており、さり気無い支援が見て取れた。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	牛乳や食物繊維の多い食材を取り入れるよう献立作成の際には気をつけている。オリゴ糖も使用している。また、運動などの機会を取り入れ、自然に排便が出るよう心掛けている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	回数や時間帯に応じてゆっくり入って頂いている。また、気持ち良く、安全に入浴して頂くために介護技術研修を実施している。希望があれば夕食後に入浴が実施できる体制にある。	ちょっと贅沢な檜の木のお風呂。4~5人が一緒に入れる広さで、個浴は勿論、仲良しと2人入浴も楽しめる。木の手触りがなんとも優しく、檜の木の香りもほんのりと漂う。職員は介護職技術研修を受け、安心・安全の身守りで入浴が実施されている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	睡眠パターンを個別・日別に把握し申し送り時に情報共有しており、安眠に向けた対応をとっている。一人ひとりの時間に合わせ入眠支援を行いつつ、また、昼寝についても個別対応をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員は入居者が使用する薬の目的や副作用、用法や用量を承知しており、入居者の一人ひとりが医師の指示と通りに服薬出来るよう支援し、症状の変化を確認している。必要時には、医療連携の看護師の指示を仰いでいる。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	ホームでの暮らしの役割が自然発生的に生じている。その事を支援しつつ、常に自信が高まるような声掛けや働きかけをしている。入居者の出来る事を認め、積極的に声掛けしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	自由に外出の希望を伝えられるような雰囲気を作り、入居者から出掛けたい場所などを日常の会話の中からくみ取り、それを立案し、外出の機会作りを行っている。	個別外出とホーム行事としての外出がある。個別外出では、本人の自宅への梅ちぎりや行きつけの美容室への同行をはじめ、家族の協力で自宅へ帰り仏壇参りなど多様な支援が行われている。この夏は、福島の子供たちを受け入れ、天草の海水浴場へ利用者も参加。社会とのつながりを大切にしている。また、熊本城旅行、五橋祭見物、本渡の西の窪公園の菖蒲の花見等、計画的な外出の機会が設けられている。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	本人の希望により、日常の金銭を管理して頂いている。金銭管理が難しい方であっても、買い物などの外出には財布を持って頂き、購入される分の支払いは自己で行なって頂くなど、金銭管理能力の維持に努めている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	入居者の要望に応じて、手紙での通信援助や電話使用時の援助など、日常的に利用出来るよう支援している。携帯電話を持参される方もいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	いずれも家庭的な雰囲気有しており、備品等も家庭的なものを揃えている。季節の花を生けたり、絵手紙などを飾ったりと和らいた雰囲気にも取り組んでいる。	吹き抜け天井は高く、太くがっしりした木材の梁の間にプロペラ扇風機が2基取り付けられ、室内の空気を還流させている。木造りのリビングは柔らかく解放感に溢れ、ゆったりとしたソファに利用者は沈むように体を委ねて過ごしている。大きな仏壇が置かれた畳敷きの仏間は、窓に面したウッドデッキへと続き、毎朝仏前で手を合わせる利用者もあるという。なお、オープンキッチンに面して、中央に置かれた2つのテーブルを囲み、利用者と職員が会話を楽しんでいる、「安らぎ」のスペースとなっている事が伺えた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	入居者が一人になったり、気の合った入居者同士で自由に過ごせるような居場所を確保している。(リビング、和室、囲炉裏の間、各居室)		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族へ自宅で使い慣れた馴染みの物の持ち込みを依頼している。一部の方には自宅で使用した物等を持ち込み、環境作りを行っている。個人に応じた介護用品を適切に配置している。	どの居室も持ち込み家具は多くなく、ベッドと整理箆箆がメインの設えとなっている。小さな仏壇や家族の写真が、僅かにその人らしさを印象付ける飾付となっているが、家財道具一式を持ち込むと「家には帰れなくなる」感が大きくなる気持ちを、ボソッと語ってくれた利用者があった。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレのファンレストテーブルや浴室の構造、共用・個室の手洗いの高さ、調理台の高さや位置、ダイニングテーブルや椅子の高さなど構造的に十分配慮している。		